

# ギリシア古代都市メッセネにおける劇場のローマ時代舞台建物の復元試案

## A TENTATIVE RECONSTRUCTION OF THE ROMAN SCENE BUILDING OF THE THEATER IN ANCIENT MESSENE

岩田千穂\*, 吉武隆一\*\*, 伊藤重剛\*\*\*  
*Chiho IWATA, Ryuichi YOSHITAKE and Juko ITO*

Ancient Messene, Greece, was founded by Epameinondas in 369 B.C.. Kumamoto University Architectural Mission for Greek classical Architecture has surveyed, since 2007, the architectural remains of the theater including more than a hundred of blocks from walls, columns, etc., in order to reconstruct its form of 2nd century A.D. The authors analyzed each block in detail and tried to reconstruct the scene building which would have been built in 2nd century A.D. and reached the conclusion that the scene building was 12.2 m high and two-storied with rows of Corinthian, Lotus-Acanthus, and Ionic columns on the front.

**Keywords:** Ancient Greece, Roman era, Messene, Theater, Scene building, Reconstruction  
古代ギリシア, ローマ時代, メッセネ, 劇場, 舞台建物, 復元

### 1. 序論

#### 1-1. 研究背景

ギリシアのペロポネソス半島南西部にある古代都市メッセネは、紀元前 369 年にエパミノンダスにより建設された都市である<sup>1)</sup>。都市の北にはイトメ山、東にはエヴァ山があり、周囲には全長約 9km に及ぶ市壁が築かれていた。これらの山の山裾のゆるやかな傾斜地に主要な公共施設が建設され、ここが都市の中心部となっている。過去の発掘調査により、スタディオン、アスクレピオス神殿、アゴラ、泉、劇場など、都市の主要な公共施設が出土した。これらのうち、劇場は、アゴラの北西隅から約 34m 西にあり、自然の斜面を利用して作られており、オルケストラ、客席、客席を支えた後壁、パロドスの壁、舞台建物、建築部材などが出土している。

メッセネの遺跡は、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、Th. Sophoulis 氏<sup>2)</sup>、G. Oikonomos 氏<sup>3)</sup>により発掘がおこなわれた。その後、1957 年から 1974 年にかけて、考古学者のオルランドス氏の指揮下で長期にわたる発掘がおこなわれたが、最終的な発掘報告書は発行されていない<sup>4)</sup>。それ以降しばらくは、発掘がおこなわれていなかったが、1987 年からメッセネ考古学協会（会長：元クレタ大学教授、P. テメリス氏）による大規模な発掘が開始され、現在も継続して調査がおこなわれている<sup>5)</sup>。

劇場の発掘は、メッセネ考古学協会により 1997 年から開始され、

発掘がひと段落した 2010 年以降は、現場での修復作業がおこなわれている。劇場の建設時期を直接特定できる碑文などの考古学的証拠は、これまでは発見されていない。テメリス氏は、発掘遺物、建築的特徴、歴史的背景などから、前 3 世紀ごろ最初の劇場が建設され、後 2 世紀ごろにローマ式劇場に改築、後 3 世紀ごろ再び改修されたと推定している<sup>6)</sup>。舞台建物については、紀元前 1 世紀までのヘレニズム時代に最初の舞台建物が建設され、後 2 世紀ごろローマ式劇場に改築した際に、新しい舞台建物が建設されたとされている。これは、発掘調査により、ローマ式の舞台建物と、その舞台床下からヘレニズム時代の舞台建物の基礎の痕跡や円柱部材が、さらに舞台建物の東方で舞台収納庫と思われる遺構が出土したことなどが、その根拠である。本稿で分析対象としているのは、ローマ式の舞台建物で、その平面形式や、遺構近くからトリアヌスとハドリアヌスの彫像が出土したことから、発掘者は後 2 世紀に建設されたものと判定している。

筆者ら熊本大学ギリシア古代建築調査団（団長：伊藤重剛）は、2007 年から 2011 年までの毎年 8 月から 9 月にかけて、建築班として当該劇場の建築調査をおこなってきた。調査団の調査内容は、劇場の建築遺構や建築部材の実測、写真撮影、そして詳細な観察記録をとることである。

\* 熊本大学大学院自然科学研究科 大学院生・修士(工学)

\*\* 熊本大学大学院先端機構 特任助教・博士(工学)

\*\*\* 熊本大学大学院自然科学研究科 教授・博士(工学)

Student, Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, M. Eng.  
Assistant Prof., Priority of Organization for Innovation and Excellence, Kumamoto University, Dr. Eng.  
Prof., Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, Dr. Eng.



写真1 劇場鳥瞰写真（メッセネ考古学協会提供）



写真2 舞台建物（左）と舞台床下（中央部）

## 1-2. 本研究の目的と研究方法

メッセネの劇場に関する研究報告として、これまでに、発掘者のテメリス氏による発掘年報が発表されている<sup>7)</sup>。また、調査団は、建築学会九州支部大会にて、2007年から2010年までの調査成果の報告をおこなっている<sup>8)</sup>。

本稿の目的は、現地の調査で得られた成果に基づき、後2世紀の舞台建物<sup>9)</sup>を復元することである。本稿では、まず劇場全体の概要と、舞台建物の遺構や建築部材の現状を述べる。さらに、これらを分析した結果を報告する。そして、分析結果に基づき舞台建物全体の復元を試みる。

## 1-3. 劇場に関する既往研究

紙数の関係で、既往研究については詳述しないが、代表的な研究書としては、ビーバーによる劇場建築の歴史を通史的に著したもののや、シアーによるローマ劇場の研究書が挙げられる<sup>10)</sup>。個別の劇場に関する復元研究は、各遺跡の発掘報告書に多く見られる。たとえば、アテネのディオニソス劇場や、サブラスの劇場などが挙げられる<sup>11)</sup>。メッセネの劇場は、近年発見された新出資料であり、劇場建物の本格的な復元研究をおこなうのは、著者らが初めてである。

## 2. 劇場遺構の現状（写真1、図1、2）

劇場は、南北、東西ともに全長約100mで、客席が南向きに造られており、その周囲は石積みの後壁で支えられている。客席は、ほとんど崩壊した状態で出土したが、最下段から2、3段程度までは残っている部分があり、最前列に2席のみ背もたれ付きの貴賓席が出土している。客席を支える後壁は、劇場の東西で長さ60mにわたって出土している。西側では、ルスティカ仕上げの石材を積み、大小4つの階段で客席と外部とをつないでいる。一方、東側の石積みで使用された石材の仕上げは西側の石材と異なり、表面の突出が少ない。また、壁には、3m～4mおきにバットレスが付けられている。

オルケストラは、円の4分の1を舞台建物が切り取る形になっている。オルケストラの直径は、幅約0.5mのエウリポス（溝）の内側に並べられた緑石の内側で21.6m、エウリポスまで含めると23.6mである。オルケストラの床面に、赤、白、灰などの約20cm角の四角い大理石板が部分的に残っている。

客席の南側には舞台建物があるが、詳細は次章で述べる。舞台建

物の東には、可動式の舞台背景を収納するための舞台収納庫と思われる遺構が出土した。遺構の西端から東側の壁までの長さが27.55m、幅が8.13mである。この中に、溝が付けられた石材がレール状に並べられた遺構が、東西に平行に3本出土した。

客席と舞台建物との間は、役者や観客が通るパロダスという通路となり、客席側の壁は、客席を支える壁となる。西パロダスの壁は、舞台建物の壁とほぼ平行で、矩形あるいはL字型に成形した石灰岩を精緻に積んでいる。ところが、この壁は、オルケストラから西へ約20mの地点で、下部のみが外側へ7度曲がっている。一方、東側のパロダスの壁は、ポロスタの石積みと、その上部が崩れた状態で発見された。この壁は、舞台建物の壁と平行でなく、5度角度をなしている。

## 3. 舞台建物の現状（写真2、図3、4）

現在残っている後2世紀の舞台建物は、東西46.6m、南北15mである。オルケストラに面する部分に、舞台の最前面となるプロスケニオンの壁、その後ろに舞台がある。その背後にはスカエナエ・フロンスが、そのさらに後方にポストスケニオンがある。スカエナエ・フロンスには3つのニッチがあり、それぞれのニッチ背後には出入口がある。舞台袖にも出入口があり、ポストスケニオンと通路でつながっている。遺構を詳細に観察すると、建物の表面にダボ穴やクランプ穴が見られる。また、出土部材の中には再加工の痕跡が観察されるものがある。これらのことから、この舞台建物は、ヘレニズム時代の舞台建物もしくは他の建物の建築部材を再利用し、それらに新しく作った部材を加えて建設されたと考えられる。以下、遺構の各部分について詳しく述べる。

### 3-1. 舞台建物主要部の躯体

舞台建物の躯体は、ポロスタ材や石灰岩で造られている。現在、石灰岩が地表から3段積み、3段目の上面がニッチや舞台袖の出入り口付近の床面となっている。1、2段目に使用された石材は、高さ0.42m～0.5mで、3段目の石材は、ニッチ部分では高さ約0.3m、それ以外の部分では、高さ約0.4mである。ニッチ以外の部分では、さらにこの上に、高さ0.43m～0.50mのポロスタ材を積み、壁を立ち上げている。現在、ポロスタ材が3段積まれたものが最高で、ニッチ床面からの高さは最高1.442mである。





図1 劇場の出土状況図 (メッセネ考古学協会作成)

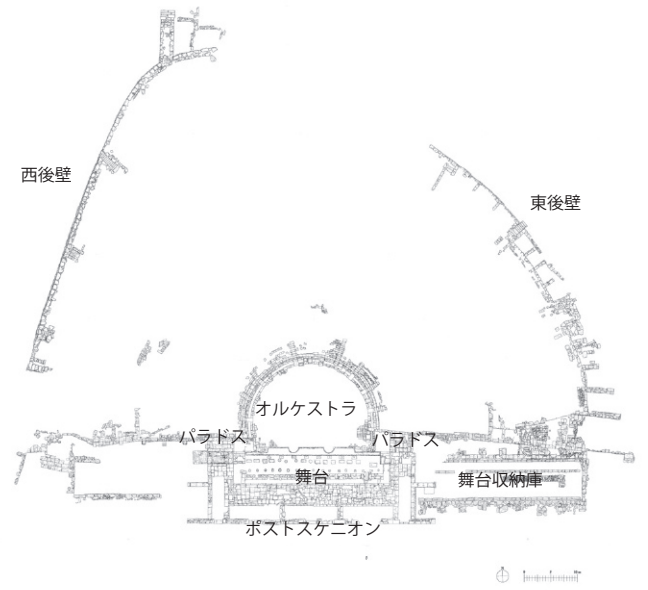


図2 劇場全体の現状平面図

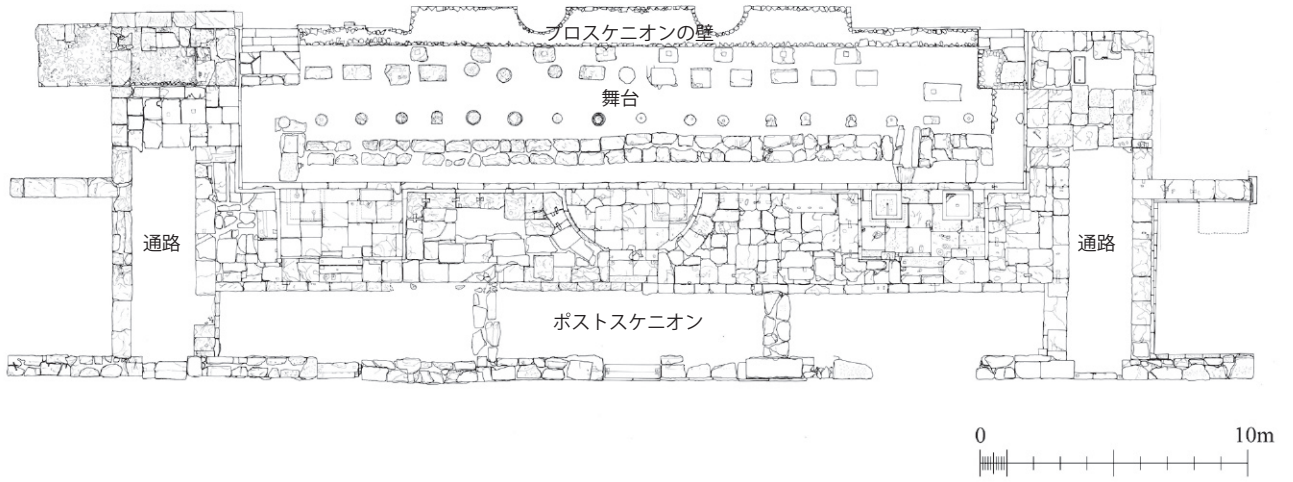
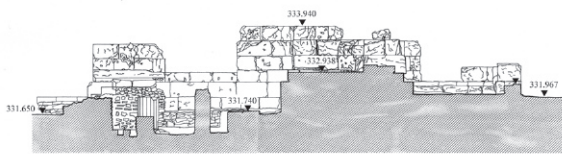
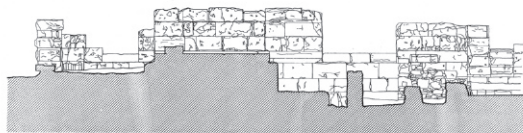


図3 舞台建物の現状平面図



中央ニッチの南北断面 (東を見る)



西ニッチの南北断面 (西を見る)



図4 舞台建物の現状断面図



写真3 スカエナエ・フロンスのポロス壁の上面に付けられた溝の痕跡

### 3-2. プロスケニオンの壁

プロスケニオンの壁は、舞台前面のオルケストラと接する部分に造られた壁で、舞台建物の正面壁から 5.27 m離れた位置にあり、全長 25.47m、幅最大 1.55m で、高さは約 1m である。壁の中央部分には、直径 1.83mの半円形ニッチが2つ、中央を基準に左右対称に配置されている。壁の端部では壁が薄くなり、厚さ 0.60m となる。この壁は、煉瓦造の躯体に漆喰を塗り、その上に厚さ 1.5cm ~ 2.0cm の大理石化粧材を貼って仕上げたようで、壁の東側でその痕跡が確認された。

### 3-3. 舞台

舞台があった部分は、現在、舞台床が失われ、舞台下が露出した状態である。舞台下の地表面には、ポロス材あるいは石灰岩で造られた円柱や、石材の列が並ぶ。また、ヘレニズム時代に建っていた舞台建物のプロスケニオン部分と思われる遺構が、出土している。

プロスケニオンの壁から約 2.5m の位置に、ポロス材で造られた円柱や半円柱付き角柱などが 18 本、舞台建物とほぼ平行に 1.25m ~ 1.85m の間隔で並んでいる。礎盤付き円柱が 4 本、20 本のフルートが付いた円柱が 8 本、6 本のフルートが付く半円柱付き角柱が 5 本、角柱が 1 本ある。円柱上面とニッチ床面との高低差は、0.54m ~ 0.64 m である。角柱付き円柱の両側面には、幅約 0.15m の溝があり、柱と柱との間に板材をはめるためのものであると考えられる。このような部材の特徴から、これらの円柱は、ヘレニズム時代の舞台建物のプロスケニオンを構成した部材であると考えられるが、形の異なる柱が不規則に並べられていることから、後 2 世紀の舞台建物を建設した際に、舞台床を支える柱として再利用されたと推察される。

### 3-4. 舞台建物のニッチ

舞台の背後には、3つのニッチが造られている。中央のニッチが最も大きく、直径 5.01mの半円形で、東西のニッチは幅 4.58m ~ 4.59m、奥行き 2.58m ~ 2.61m の矩形である。オルケストラ床面とニッチ床面との高低差は、1.288m である。

各ニッチには、底面が約 1.20 m 角のペDESTルの台座が2つずつ設置された痕が見られ、東側の矩形ニッチには実際にペDESTルの最下部の部材が2つ残っている。各ニッチ後方には、幅 1.625m ~ 1.782m の出入口があり、敷居が残っている。それらの両脇の壁には、角柱の片蓋柱があった痕跡が確認される。

### 3-5. ポストスケニオンと通路

舞台建物の背後にある室はポストスケニオンと呼ばれ、役者の控室や舞台への通路となっていた。当該遺構のポストスケニオンは、石灰岩の仕切り壁により 3 室に分かれており、各室が 3 つのニッチ後方にある出入口から舞台へ出入りできる。3 室のうち、中央の室がやや広く、長さ 10.02m で、東西の室が長さ 9.5 ~ 9.55m で、各室の幅は 2.82m ~ 2.91m である。また、ポストスケニオンの東西両端には、舞台両袖の出入口へ向かう全長約 8m、幅約 2.4m の通路が設けられている。この通路の北側には、舞台、東西両側、そしてパラスへ抜ける出入口があり、南側にも外部へ抜ける出入口がある。

## 4. 舞台建物の建築部材

劇場遺構発掘時に、舞台建物を構成したと考えられる建築部材が

多く出土し、取り上げられて別所に保管されている。建築部材は、大理石や石灰岩などで造られている。2007 年から 2011 年の調査で、約 150 部材の実測をおこない、125 部材の実測図を作成した。また、客席部材約 500 個の寸法計測をおこなった。実測をおこなった 150 部材のうち、スカエナエ・フロンスの復元に用いた部材は、140 部材である。以下、各部材の現状を述べる。

### 4-1. 礎盤

礎盤はほぼ全体が残っているものを 21 個実測した。メッセネの礎盤は、上からトルス、スコティア、トルスが施されたいわゆるアッティカ式のモールディングのある部分と、その下のプリンスとが、1 つの石材で作られている。礎盤の上面には 1 つ、底面には 1 つまたは 3 つのダボ穴がある。礎盤の大きさはさまざまで、円形のプリンスを持つ部材と矩形のプリンスを持つ部材が混在している。

### 4-2. 柱身

柱身部材は、すべて割れて、いくつかの破片の状態出土した。接合可能な破片は接合され、ほぼ完全な姿に復元されている部材もある。調査で実測した柱身は、ほぼ完全な形に復元されたものが 7 本、底面のみ残るものが 13 本、上面のみ残るものが 12 本である。全長が判明している柱身は、高さにより明確に 4 種類に分けられる。最も高い柱身が平均高さ 4.057m、2 番目に高い柱身が高さ 3.524m、3 番目に高い柱身が高さ 2.906m、そして最も低い柱身が高さ 2.329m である。

柱身には、様々な材質の石材が使用されており、灰色花崗岩、赤斑大理石、赤白の縞模様の大石、薄緑の縞模様の大石、灰色大理石、粒が大きな灰色大理石、そして白色の結晶質大理石の、7 種の石材を使用したことが確認された。劇場で出土した柱身部材は、全体が一つの石材で造られている。柱身の上部には、トルスのモールディングが付き、下部には、0.1m 程度の平縁が付いている。

### 4-3. 柱頭 (図 5)

柱頭は、合計 17 個の実測をおこない、2 個のコリント式柱頭、5 個のイオニア式柱頭、10 個のロータス・アカンサス式柱頭の 3 種類がある。コリント式柱頭は、同種の柱頭部材破片が見つかっており、実際は 2 個以上あったと考えられる。次に、イオニア式柱頭は、装飾で見ると 2 種類出土している。ひとつは通常イオニア式柱頭で、1 個出土しており、もうひとつは渦巻が 4 隅に付くイオニア式柱頭で、4 個出土している<sup>12)</sup>。両者を比較すると、部材の高さや上面、底面幅などに大きな差はない。最後に、ロータス・アカンサス式柱頭は、ベル型のカラトスにロータスの葉とアカンサスの葉が 1 段ずつ付く<sup>13)</sup>。

### 4-4. アーキトレイブ・フリーズ (図 6)

アーキトレイブとフリーズは、柱の柱頭の上に乗る梁部材である。これらは、本来別々の部材であるが、メッセネの劇場の場合、1 つの部材として造られている。アーキトレイブ部分には、3 段のファスキアとその上にクラウニング・モールディングが施されており、フリーズはシーマ・レヴェルサのモールディングになっている。出土した部材は、高さが 0.6m 程度の大きな部材と、高さが 0.3m 程度の小さな部材とに分かれる。高さ 0.6m の部材は、前面および背面にモールディングが施されており、フリーズやファスキアに装飾が有るもの<sup>14)</sup>と、無いものがある。一方、高さ 0.3m の部材は、前面のみにモールディングが施され、背面は平滑に仕上げられ、ファ



スキアやフリーズに装飾が施されたものは無い。

#### 4-5. ゲイソン (図7)

ゲイソンは、アーキトレイブ・フリーズの上に載る軒部材である。部材ごとの加工精度には、かなりばらつきがある。また、部材の高さが一定しておらず、上面が水平でないものが多い。このような上面の勾配は水勾配である可能性がある。しかし、勾配にばらつきがあることから、他の建物の部材を再加工してゲイソンを制作したためか、施工誤差とも考えられる。

当劇場の舞台建物から出土したゲイソンは、部材正面のモールディングに施された装飾の有無により、明確に二分することができる。一方は、心鏃装飾 (heart-and-dart) と舌葉装飾 (tongue-and-leaf) との浮彫装飾が施されており、もう一方は、施されていない。浮彫装飾付きの部材は、正面の高さが平均 0.309m、浮彫装飾のない部材は、正面の高さが平均 0.253m である。

#### 4-6. シーマ

シーマはゲイソンの上部に据えられる。これまでに実測した4つの部材は全体的に高さが揃っており、平均高さ 0.197m である。部材正面のモールディングは、下段に大きなシーマ・レヴェルサが施され、上部にカラスのくちばしの様な水切りが付けられている。

#### 4-7. 破風

ほぼ完全な状態で発見された破風部材と思われるものは、長さ 2.113m、幅 1.055m で、正面の高さは 0.352m である。また、正面に三角形の破風の痕跡が観察される小さな破片が、4 個見ついている。これらは、全て大理石製で、破風の勾配はおおよそ 1/6 である。

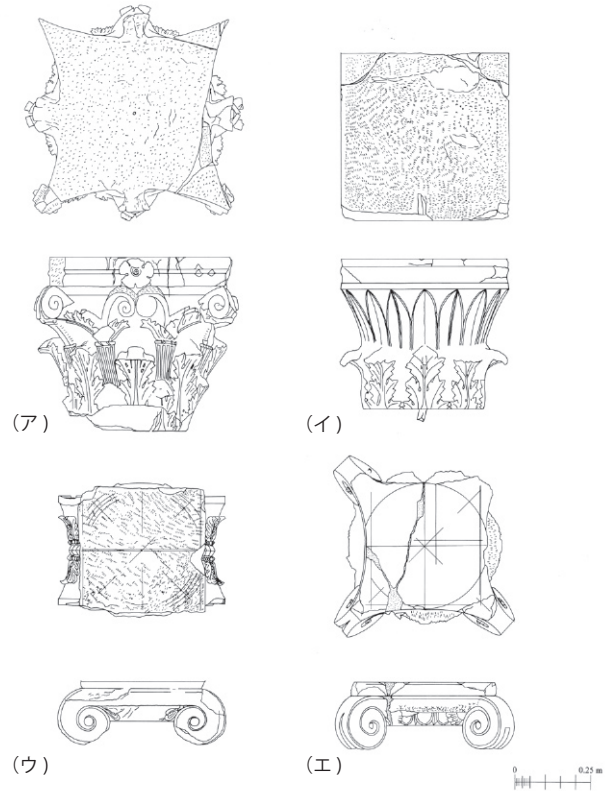


図5 出土した柱頭

(ア) コリント式柱頭 (No. B808) (イ) ロータス・アカンサス式柱頭 (No. B1909)  
(ウ) 通常のイオニア式柱頭 (No. B1912) (エ) 四隅に渦巻が付くイオニア式柱頭 (No. B11085)

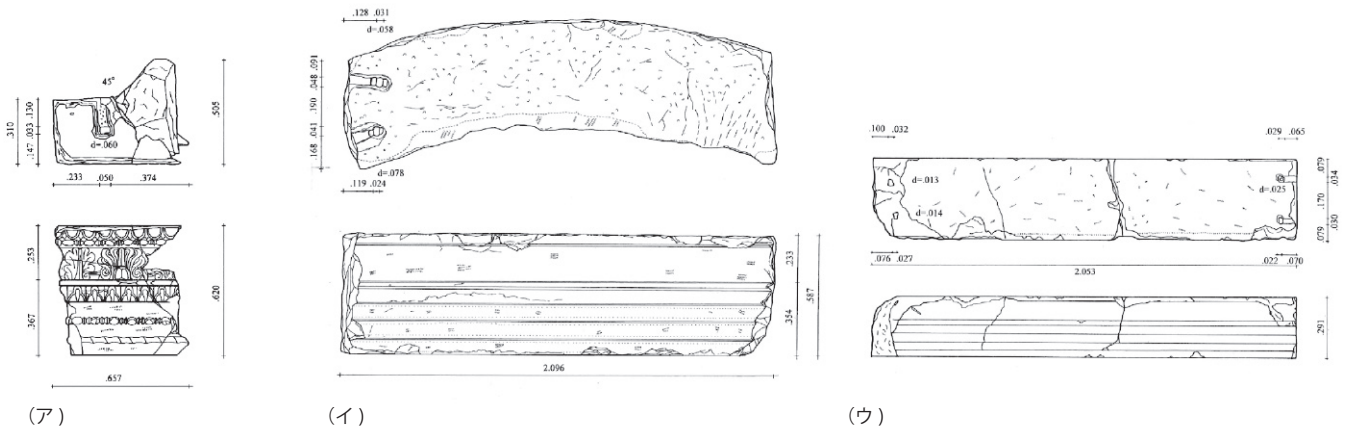


図6 出土したアーキトレイブ・フリーズ

(ア) 装飾が有る約 0.6m のアーキトレイブ・フリーズ (No. B66+1402) (イ) 装飾が無い約 0.6m のアーキトレイブ・フリーズ (No. B27) (ウ) 装飾が無い 0.3m のアーキトレイブ・フリーズ (No. B960+988)

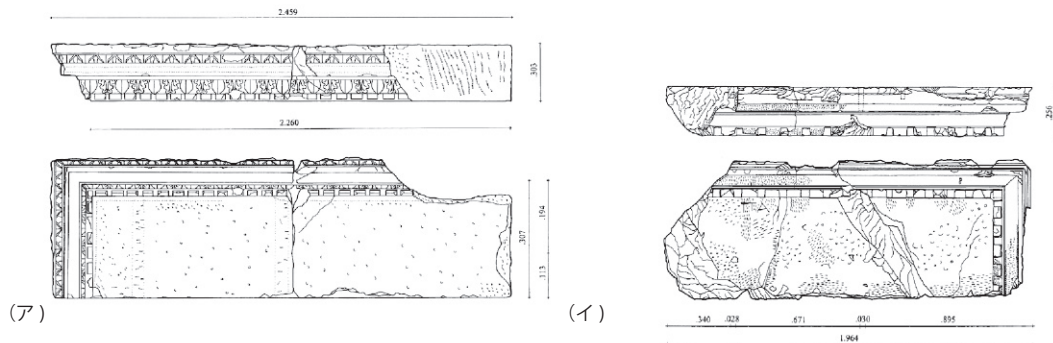


図7 出土したゲイソン

(ア) モールディングに装飾が有るゲイソン (No. B2) (イ) モールディングに装飾が無いゲイソン (No. B8)

## 5. 舞台建物の推定復元

本章では、現地調査で得られた遺構と建築部材の情報をもとに、舞台建物の復元を試みる。なお、各部復元寸法を決定する際は、平均値をもって復元値とした。

### 5-1. スカエナエ・フロンスの復元

スカエナエ・フロンスは列柱で構成され、舞台建物の中では最も多くの種類の部材が使用された部分である。

#### 1) 柱部材の分類と組み合わせ

メッセネの劇場の柱は、礎盤、柱身、柱頭の3部材で構成される。これらの部材が大量に出土していることから、それらがどのように組み合わせられるかを明らかにする必要がある。ここで、明確に高さの異なる4種類の柱身があるので、礎盤と柱頭も同様に4種類あり、高さの異なる4種類の柱の組み合わせが存在したと考えられる。以下では、各部材の寸法関係をもとに、4種類の組み合わせを明らかにする。

礎盤は、部材の高さや上面直径などがまちまちであるので、それらの寸法比較による分類が困難である。そこで、柱身の底面直径と礎盤の上面直径の大小関係をもとに、礎盤と柱身の組み合わせの分類をおこなう。つまり、礎盤の上面寸法は、組み合わせる柱身の底面寸法の最小値より大きく、次に高い柱身の底面直径の最小値より小さいと考え、寸法を算出した。このように礎盤と柱身の組み合わせを求めると、最も高い柱身(底面直径最小0.560m 最大0.596m)には、上面直径0.560m以上の礎盤が組み合わせられる。2番目に高い柱身(底面直径最小0.467m 最大0.504m)には、上面直径0.467m以上0.560m未満の礎盤が組み合わせられる。3番目に高い柱身(底面直径最小0.406m 最大0.416m)には、上面直径0.406m以上0.467m未満の礎盤が組み合わせられる。そして、最も低い柱身(底面直径最小0.340m 最大0.402m)には、上面直径0.340m以上0.406m未満の礎盤が組み合わせられる。

一方、柱頭の底面直径は、柱身の上面直径よりも小さくすると推測できる。ただし、イオニア式柱頭は、渦巻装飾が底面より低い位置まで張り出しており、対角にあたる渦巻装飾同士の距離より円柱の上面直径が大きいと、渦巻と円柱とがぶつかってしまう。したがって、イオニア式柱頭に接続する柱身の上面直径は、基本的に柱頭底面直径(最小0.345m 最大0.408m)と同程度か、それ以下である必要がある。この条件を満たす柱身は、上面直径が最小0.284m 最大0.341mの最も低い柱身のみである。次に、コリント式柱頭は、出土している2部材の底面直径がともに0.400mであるので、組み合わせられる柱身の上面直径は、0.400m以上となる。また、柱頭の底面に3つのダボ穴があるため、柱身上面にも同様に3つのダボ穴があると考えられる。これらの条件を満たす柱身は、最も高い柱身のみである。最後に、ロータス・アカンサス式柱頭(底面直径最小0.310m 最大0.420m)と組み合わせられる柱身を考える。ここで、まだ組み合わせが決定していない柱身は、2番目と3番目に高い柱身である。直径の大小関係から柱頭と柱身の組み合わせを考えると、底面直径が0.419mより大きく0.495m以下のロータス・アカンサス式柱頭が2番目に高い柱身(上面直径最小0.433m 最大0.495m)と組み合わせられ、底面直径が0.419m未満のロータス・アカンサス式柱頭が3番目に高い柱身(上面直径最小0.370m 最大0.419m)と組み合わせられたと考えられる。ただし、ロータス・アカンサス式柱頭は、部

材ごとにプロポーシオンがまちまちであるため、底面直径が0.419m以下でも、背が高い部材が存在する。そこで、これらの柱頭は、底面直径よりは柱全体の高さを重視して制作されたと考え、底面直径0.419m以下でも高さ0.441m以上の部材は、2番目に高い柱と組み合わせられたと推定する。

以上より、4種類の柱の組み合わせが決定した。4種類の柱の高さを求めると、コリント式柱頭が載る最も高い柱が高さ4.999m、大きなロータス・アカンサス式柱頭が載る2番目に高い柱が高さ4.207m、小さなロータス・アカンサス式柱頭が載る3番目に高い柱が高さ3.597m、そしてイオニア式が載る最も低い柱が高さ2.700mとなる。

#### 2) オーダーの復元(表1、図8)

ここでは、スカエナエ・フロンスに立っていた列柱のオーダーを復元する。まず、スカエナエ・フロンスが何階建であったかを考える。出土部材をみると、アーキトレイブ・フリーズ部材は、高さ約0.3mの部材と高さ約0.6mの部材がある。また、ゲイソン部材は、部材正面の浮彫装飾の有無により2種類に分類される。このように、アーキトレイブ・フリーズとゲイソンの部材が2種類ずつあるので、スカエナエ・フロンスは2階建であると考えられる。また、高さの異なる4本の柱があることから、1層に2種類のオーダーがあった可能性が高い<sup>15)</sup>。

次に、4種類の柱の位置を明らかにする。通常、2階建のスカエナエ・フロンスでは、1階に背の高いオーダーが、2階に背の低いオーダーが造られる。スカエナエ・フロンスにニッチが造られている場合、ニッチのオーダーと列柱のオーダーが異なる場合がある。その場合、1階に限って言うと、ニッチのオーダーが列柱のオーダーより高くなる。ただし、2階のオーダーに関しては、この通りではない。

柱を構成する各部材の分類結果から、最も高い柱が4本、2番目に高い柱が7本、3番目に高い柱が11本、最も低い柱が6本あることが分かった。ここで、各ニッチには2本ずつ、1階あたり計6本の柱が立つことから、7本以上ある2番目と3番目に高い柱は、ニッチには立たないということになる。したがって、発見された部材から判明した各柱の数とオーダーの大小関係を合わせて柱の位置関係を考えると、最も高い柱が1階のニッチに、2番目に高い柱が1階の列柱に、3番目に高い柱が2階の列柱に、そして最も低い柱が2階のニッチに立つという組み合わせであったことが分かる。

さらに、柱の上に置かれる梁および軒部材の位置を考える。アーキトレイブ・フリーズ部材については、高さ約0.6mの部材が1階へ、高さ約0.3mの部材が2階へ配置されたと考えられる。ここで、高さ約0.6mの部材の中に、浮彫装飾のある部材とない部材とがあるので、これらの位置を決定する。浮彫装飾のある部材の中に、90度を挟む2面にモールディングがあるため、矩形ニッチの西側出隅のポディウムに立つ柱の上か、ニッチの中に建てられた柱の上に置かれたと判断される部材がある。一方、浮彫装飾のない部材の中には、90度を挟む2面にモールディングがあり、かつ片面に円弧がついていることから、中央ニッチの西側出隅のポディウムに立つ柱の上に据えられたと判断できる部材がある。浮彫装飾のある部材とない部材の双方が、列柱の上に混在するとは考えられないので、おそらく、浮彫装飾のある部材がニッチの中に立つ柱の上に配置され、浮彫装飾のない部材が列柱の上へ配置されたと推測される。

ゲイソン部材は、部材前面に浮彫装飾がある高さ平均0.309mの部材が1階へ、装飾がない高さ平均0.253mの部材が2階へ配置されたと考えられる。シーマは、2階のゲイソンの上に配置されたと推測される。

以上より、スカエナエ・フロンスのオーダーが復元された。部材の実測値より、それらの平均値を用いてオーダー各部の復元寸法を割り出した(表1)。1階ニッチのオーダーの高さが5.928m、1階列柱のオーダーの高さが高さ5.207m、2階列柱のオーダーの高さが4.143m、そして2階ニッチのオーダーの高さが3.246mとなる(図8)。

### 3) ポディウムの復元

列柱部分のポディウムは、現在、上部コーニスを除いて最高1.442mである。現在残っている最上段のポロスの上面に溝が付けられており、ここにはめ込むようにコーニスが置かれ、その上に列柱が配置されたと推測される(写真3)。ここで、ポディウムの現在の高さとの差は0.114mであることから、両者はほぼ同じ高さであったと考えられる。そこで、列柱部分のポディウムは、高さ1.442mまでポロス材を積み、その上にペDESTALのコーニスと同じ高さ0.226mのコーニスを載せたと推定した。

1階のゲイソンと2階の柱の間にもポディウムが造られたと考えられるが、こちらに関しては全く手がかりがない。他の劇場を見ると、スカエナエ・フロンスの2階のポディウムの高さが1階のポディウムの高さの半分程度になる例が多いので、メッセネも同様であると推定し、2階列柱のポディウムの高さを0.834mとした<sup>16)</sup>。

2階ニッチのポディウムに関しても、出土遺構や部材の中に手がかりが全くない。一般に、スカエナエ・フロンスのオーダーは、最上階においてニッチと列柱との梁の高さを揃える。メッセネの場合は、2階が最上階であるので、この部分で梁の高さを揃えたと推測される。しかし、1階のニッチと列柱とでオーダーの高さが異なるので、2階で梁の高さを揃えるためには、2階の列柱とニッチのポディウムの高さを調整する必要がある。ニッチ床面から列柱の2階柱頭上面までの高さは、11.303mであるので、これからニッチ1階のペDESTAL、オーダーと2階の柱の高さを引くと、1.132mとなり、これをニッチ2階のポディウムの高さとして推定した。

### 4) 柱の配置と柱間寸法(図11)

ここでは、アーキトレイブ・フリーズの寸法を元に、柱の配置と各柱の柱間真真間距離とを算出する。

アーキトレイブ・フリーズ部材の中で、全長が判明し、かつ円弧がついているものが1つ発見されている。この部材の全長が2.096mであることから、半円形ニッチの側面へ回り込むポディウムの上に載る柱は、この部材が届く位置、すなわち、ニッチの出隅部分のポディウムの上に据えられた柱の中心から2mほどの位置に据えられたと推定される(図9)。

ここで、ポディウム上のその他の部分の柱配置を考える。これまでに発見されたアーキトレイブ・フリーズ部材の中で全長がわかっているものを実測したところ、No. 325が全長1.768m、No. 27が全長2.096m、No. 960+988が全長2.053mである。柱と柱の真真間距離は、アーキトレイブ・フリーズ部材の全長とほぼ同値であると考えられることから、列柱の柱の真真間距離は、約1.7m～約2mで

あると考えられる。

部材 No. 960+980 の両端に、隣の部材と平行に接続するようなク

表1 オーダー各部の復元寸法

1階のオーダー各部の復元寸法

ニッチ	寸法 (m)	最小値	データ 数	列柱	寸法 (m)	最小値	データ 数
		最大値				最大値	
礎盤プリンス幅	0.758	0.755 0.760	2	礎盤プリンス幅	0.684	0.642 0.700	4
礎盤プリンス高さ	0.135	0.134 0.135	2	礎盤プリンス高さ	0.126	0.109 0.140	4
礎盤上面直径	0.596		1	礎盤上面直径	0.526	0.470 0.556	4
礎盤高さ	0.240		1	礎盤高さ	0.188	0.156 0.212	4
柱身底面直径	0.574	0.560 0.596	4	柱身底面直径	0.491	0.467 0.504	7
柱身高さ	4.057	4.034 4.068	3	柱身高さ	3.524		1
柱身上面直径	0.515	0.510 0.523	3	柱身上面直径	0.452	0.433 0.495	4
柱頭底面直径	0.400	0.400 0.400	2	柱頭底面直径	0.582	0.552 0.600	6
柱頭高さ	0.567	0.652 0.671	2	柱頭高さ	0.471	0.441 0.515	5
アーキトレイブ底面幅	0.412		1	アーキトレイブ底面幅	0.381	0.372 0.412	2
フリーズ上面幅	(0.534)	(0.498) (0.555)	(3)	フリーズ上面幅	0.534	0.498 0.555	3
アーキトレイブ高さ	0.367		1	アーキトレイブ高さ	0.334	0.260 0.370	4
フリーズ高さ	0.253		1	フリーズ高さ	0.234	0.233 0.235	3
アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.620		1	アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.592	0.587 0.596	3
コーニス高さ	0.309	0.293 0.320	8	コーニス高さ	0.309	0.293 0.320	8

2階のオーダー各部の復元寸法

ニッチ	寸法 (m)	最小値	データ 数	列柱	寸法 (m)	最小値	データ 数
		最大値				最大値	
礎盤プリンス幅	0.558		1	礎盤プリンス幅	0.591	0.572 0.630	10
礎盤プリンス高さ	0.077		1	礎盤プリンス高さ	0.12	0.099 0.143	10
礎盤上面直径	0.390		1	礎盤上面直径	0.428	0.406 0.463	11
礎盤高さ	0.146		1	礎盤高さ	0.178	0.154 0.234	11
柱身底面直径	0.378	0.340 0.402	6	柱身底面直径	0.411	0.410 0.416	3
柱身高さ	2.329		1	柱身高さ	2.906	2.906 2.906	2
柱身上面直径	0.313	0.284 0.341	6	柱身上面直径	0.399	0.370 0.419	6
柱頭底面直径	0.365	0.345 0.408	5	柱頭底面直径	0.331	0.310 0.374	3
柱頭高さ	0.148	0.141 0.162	5	柱頭高さ	0.394	0.363 0.425	3
アーキトレイブ底面幅	0.330	0.321 0.339	2	アーキトレイブ底面幅	0.33	0.321 0.339	2
フリーズ上面幅	0.390	0.387 0.392	2	フリーズ上面幅	0.39	0.387 0.392	2
アーキトレイブ高さ	0.181	0.179 0.182	2	アーキトレイブ高さ	0.181	0.179 0.182	2
フリーズ高さ	0.113	0.112 0.113	2	フリーズ高さ	0.113	0.112 0.113	2
アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.293	0.291 0.295	2	アーキトレイブ・フリーズ高さ	0.293	0.291 0.295	2
コーニス高さ	0.253	0.230 0.280	12	コーニス高さ	0.253	0.230 0.280	12
				シーマ高さ	0.197	0.185 0.211	4



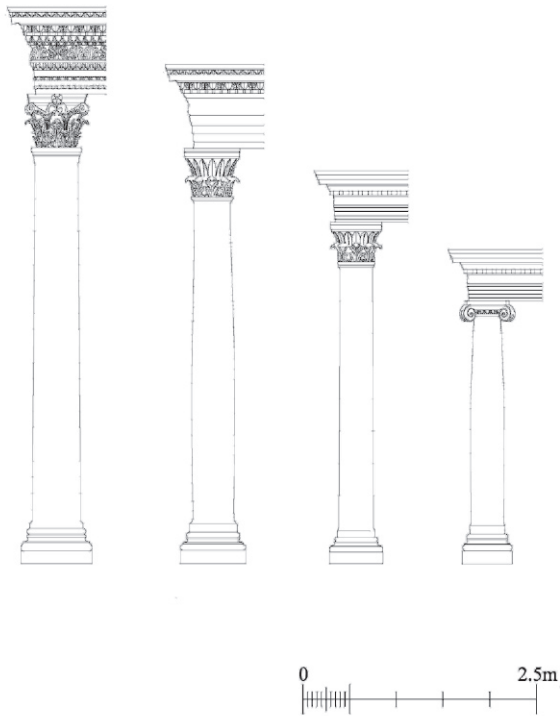


図8 スカエナエ・フロンスの各部オーダー復元図  
(左から順に、1階ニッチ、1階ポディウム、2階ポディウム、2階ニッチ)

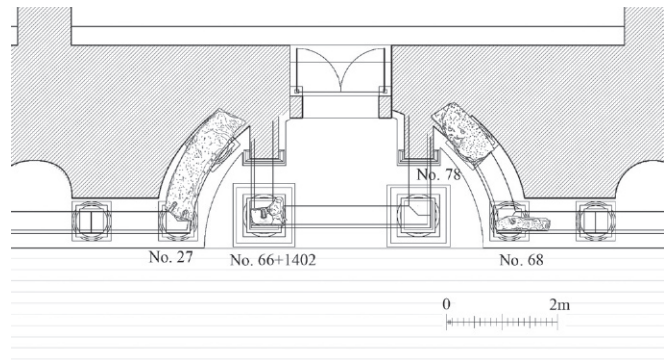


図9 半円形ニッチ周辺のアーキトレイブ・フリーズの配置

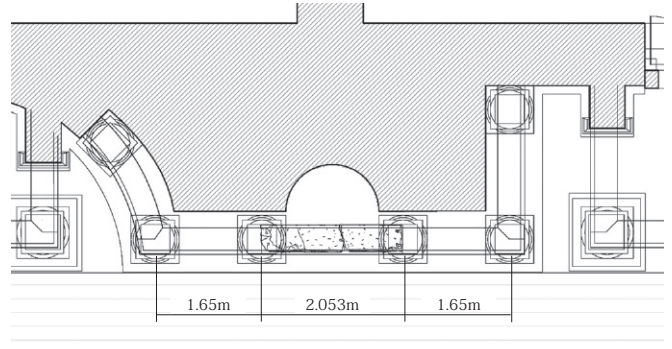


図10 ニッチ間のポディウム上の柱・梁配置と柱間寸法

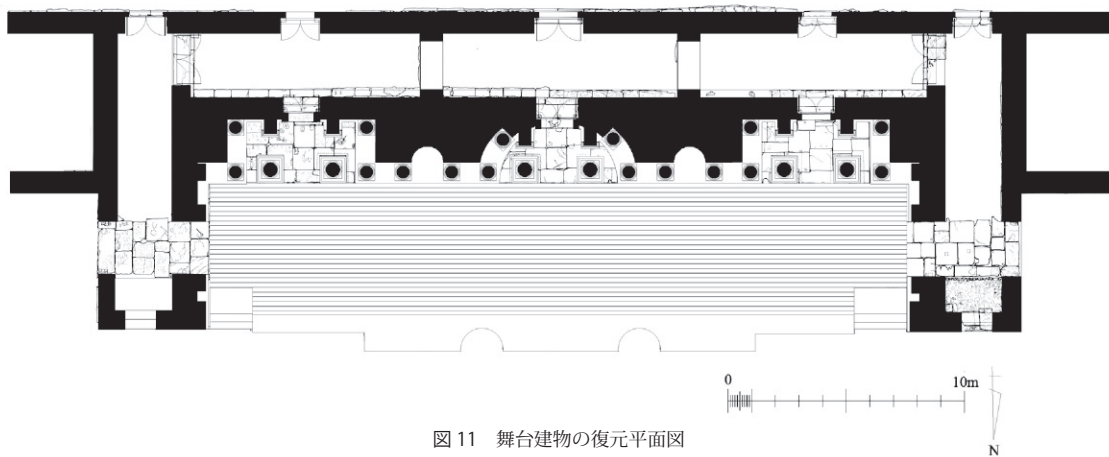


図11 舞台建物の復元平面図

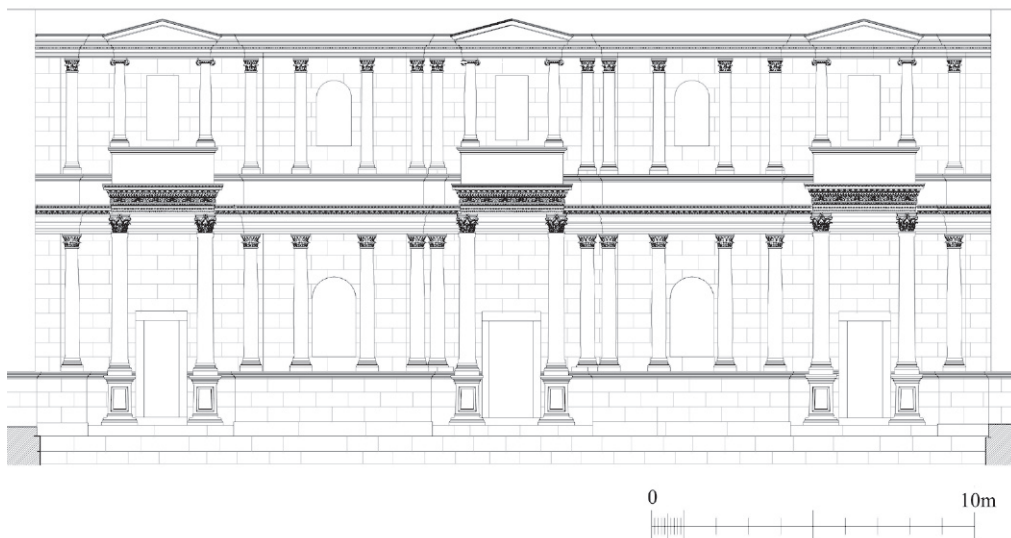


図12 スカエナエ・フロンスの立面の復元試案



ランプ穴があることから、この部材が載る柱の外側には、さらに1本ずつ柱が立っていたことが判明した。4本以上の柱が一列に並ぶのは、ニッチとニッチの間のポディウムの上のみである。この部分のポディウムは全長6.06mなので、出土部材の全長と合わせて考えると、ここには4本の柱が立ち、中央2本の柱の真真間距離が2.053mとなり、左右2本の柱の真真間距離が約1.65mとなると考えられる(図10)。他方、矩形ニッチの奥行きは、東ニッチが2.58m、西ニッチが2.61mであるので、矩形ニッチに回り込むポディウムの上に立つ列柱は、1辺につき1柱間であったと考えられる。すると、柱の真真間距離は、東ニッチで2.089m、西ニッチで2.119mとなる。

一般的に、スカエナエ・フロンスの列柱は、舞台両袖の出入口口まで回り込み、開口部の両側には柱が配置される。しかし、メッセネの場合、仮にここまで柱が回り込むと、背後の壁が厚さ1m弱となり、2階建て12m程度の高さまで立ち上がる場合、自立できない可能性がある。したがって、この部分には厚さ1.5m程度の壁が立ちあがり、開口部の両側には、片蓋柱があったと推定した。

#### 5) ニッチ

各ニッチの床面には、約1.2m角の2つのペDESTALが据えられた設置痕があり、東ニッチには、実際にペDESTALのベースが残っていることから、中央および西ニッチにも、同様にペDESTALが2つずつ据えられたと考えられる。ペDESTALは、ベース、本体部分、そしてコーニスの3部材から成り、各部材が発見されている。ペDESTAL全体の高さは、1.554mで、上面寸法は1.050m角である。コーニス部材の上面にダボ穴が残っており、上面中央部分が粗仕上げとなっていることから、この上に柱が載せられていたと考えられる。1階のニッチのオーダーの高さは5.928mであるので、ペDESTALと合わせた高さは、7.474mとなる。2つのペDESTALの設置痕の位置から、それらの上に載っていた柱の柱間真真間距離は、中央ニッチで2.750m、東西ニッチで2.651mであったことがわかる。

東ニッチでは、片蓋柱の痕跡が発見されている。具体的には、出入口から0.247mの位置に、長さ0.516m、高さ0.540mのポロス材が、壁と一体になるように置かれている。この石材が、壁から0.290m迫り出していることから、この部分にポディウムをペDESTAL状に立ち上げ、化粧材を貼って仕上げ、その上に角柱の片蓋柱が載せられたと推測される。片蓋柱は、各ニッチの出入口の両脇に造られ、これらは、ニッチ前方のペDESTALに載る柱と同じ高さまで立ちあがり、梁で接続されていたと考えられる<sup>17)</sup>。

#### 5-2. プロスケニオンの壁の復元

プロスケニオンの壁は、現在オルケストラから高さ約1.00mまで残っているが、当時は舞台の高さ1.228mまで立ちあがり、この壁の一部を利用して舞台の床板を張っていたと考えられる。プロスケニオンの壁は煉瓦造りで、表面には大理石の化粧材が貼られていた。直径1.83mの半円形ニッチが中央部に2つ設けられた。

#### 5-3. 舞台の復元

舞台部分には、木造の床板が張られ、ニッチ床面と舞台床面が同じ高さに揃えられたと考えられる。ニッチ前面の舞台に面する壁に、ニッチ床面あるいはパラスケニオン床面の端部から前方へ下部の石材列が飛び出し、段差となっている(写真2)。この段差の上面からニッチ床面までの高さは0.270m～0.300mである。この段差からプロスケニオンの壁へ南北方向に、舞台を張るための床梁を架け

たと推測される。この時、舞台下に並べられたポロス材の再利用部材の円柱が、この床梁の中間部分を支えていたと考えられる。

#### 5-4. ポストスケニオンと通路の復元

ポストスケニオンは、3室に分かれていたが、おそらく各室の行き来はでき、通路のようになっていたと考えられる。各室間を仕切る壁および南側壁は、石灰岩で造られ、内部の壁はポロスで造られている。各室には外部と舞台、それぞれへ続く出入口があり、ここには内開きの扉が入っていた。ポストスケニオンの上部構造は不明であるが、階段の痕跡が見つからなかったので、1階建てであっただろう。

また、舞台建物の東西両端には、全長約8m、幅約2.4mの通路がある。この通路の北側には、舞台、東西両外側、そしてパダロスへ抜ける出入口があり、南側にも外部へ抜ける出入口が設けられている。役者はここを通り、舞台と控室、外部とを行き来していたと推察される。ここにも階段の痕跡がないことから、1階建てであったと考えられる。

## 6. 結論

本研究によって、メッセネの劇場における後2世紀の舞台建物の詳細がはじめて明らかになった。今回の研究で明らかになった点をまとめると、以下のようになる。

後2世紀の舞台建物は、全長46.6m、幅約15mの建物で、前面に全長29.47mの木造の舞台があり、その背後に2階建てのスカエナエ・フロンスが立ち上がっていた(図12)。舞台建物には3つのニッチがあり、中央が半円形、東西が矩形のニッチであった。ニッチには、それぞれ2本の柱がペDESTALの上に立っており、後方に立つ角柱の片蓋柱と梁で接続していた。スカエナエ・フロンスには、4種類のオーダーが用いられ、ニッチの1階にコリント式オーダー、2階にイオニア式オーダー、列柱の1階に背の高いロータス・アカンサス式オーダー、2階に背の低いロータス・アカンサス式オーダーが使用されたと推測される。1階と2階を比較すると、1階部分にはより装飾的なオーダーが用いられていた。舞台建物の後方には、1階建てのポストスケニオンがあった。建物の東西には、長さ約8mの通路があり、ポストスケニオン、舞台、パダロスや外部へと続く出入口が設けられていた。

一般に、劇場のスカエナエ・フロンスの列柱にはコリント式オーダーやイオニア式オーダーが使用されるが、メッセネの劇場では、さらにロータス・アカンサス式柱頭を加えた、多様なオーダーが使用される珍しい例である。

## 謝辞

本研究は、平成21～23年度日本学術振興科学研究費基盤(S)課題番号:20226012(研究代表者:伊藤重剛)の助成を得た。また、平成20年度・前田記念工学振興財団(吉武隆一)の助成を得た。記して謝意を表す。

## 注

- 1) P. Themelis: *H Αρχαία Μεσσήνη*, Αθήνα, 2002, p. 20. (The Ancient Messene in Greece).
- 2) Th. Sophoulis: *Prakt*, 1895, p. 27; *AM*, 1895, p. 375; *AA*, 1896, p. 73, pp. 453-454

- 3) G. Oikonomos: Prakt, 1909, pp. 201-205; 1925, pp. 55-66; BCH, 1925, pp. 453-454
- 4) A. K. Orlandos: Report of Excavation, Ergon, 1959, pp. 143-148; 1960, pp. 110-117; 1961, 159-166; 1963, pp. 119-125; 1964, pp. 88-102; 1965, pp. 90-101; 1970, pp. 97-132; 1973, pp. 67-81; 1974, pp. 79-82
- 5) メッセネ考古学協会によるメッセネの発掘に関しては、以下に報告されている。P. Themelis: Ανασκαφή Μεσσηνής, ΠΑΕ 1986-2000; Ανασκαφή Μεσσηνής, Ergon, 1987-2002
- 6) 劇場の発掘報告は、以下の年報を参照。P. Themelis: Π.Α.Ε. 1987, pp. 73-79, Εικ. 1-4, Πιν. 64α-65β; 1988, pp. 45-52, Εικ. 1-5, Πιν. 34-38β; 1989, p. 91, Εικ. 21-22, Πιν. 70β-71β; 1996, pp. 153-156, Εικ. 5, Πιν. 62β-65β; 1997, pp. 85-89, Εικ. 3, Πιν.38-43β; 1998, pp. 102-106, Πιν. 42α-50β; 1999, pp. 76-81, Εικ. 3-4, Πιν. 48β-51β; 2000, pp. 76-82, Εικ. 1, Πιν. 41α-47γ; 2001; 2002, pp. 22-34; 2003, pp. 26-28; 2004, pp. 28-29; 2005, pp. 39-48; 2006, pp. 32-43.
- 7) 劇場の発掘成果をまとめた中間報告書は以下の通り。Π. Θέμελης: Το Θέατρο της Μεσσηνής Αρχαιολογική Τεκμηρίωση, Αθήνα, 2008 (P. テメリス『メッセネの劇場の考古学的検証』(ギリシア語))
- 8) 熊本大学によるメッセネの劇場の調査報告は、以下の通り。吉武隆一、伊藤重剛、岩田千穂、『地中海古代都市の研究(133)メッセネにおける劇場調査報告 2010(1)スカエナエ・フロンスの柱頭』、日本建築学会九州支部研究報告、50号3、pp.637-640、2011年3月、岩田千穂、吉武隆一、伊藤重剛、『地中海古代都市の研究(134)メッセネにおける劇場調査報告 2010(2)、「ローマ時代スケエネの復元試案」日本建築学会九州支部研究報告、50号3、pp.641-644、2011年3月、吉武隆一、伊藤重剛、岩田千穂ほか、『地中海古代都市の研究(128)メッセネにおける劇場調査報告 2009(1)平面』、日本建築学会九州支部研究報告、第49号3(計画系)、pp.585-588、2010年3月、ソクンティエー・セイン、吉武隆一、伊藤重剛、岩田千穂ほか、『地中海古代都市の研究(129)メッセネにおける劇場調査報告 2009(2)スケエネ』、日本建築学会九州支部研究報告、第49号3(計画系)、pp.589-592、2010年3月、岩田千穂、伊藤重剛、吉武隆一ほか、『地中海古代都市の研究(130)メッセネにおける劇場調査報告 2009(3)スケエネ部材』、日本建築学会九州支部研究報告、第49号3(計画系)、pp.593-596、2010年3月、谷皓司、伊藤重剛ほか、『地中海古代都市の研究(123)古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(1)概要』、日本建築学会九州支部研究報告、第48号(計画系)、pp.773-776、2009年3月、中之丸論志、伊藤重剛ほか、『地中海古代都市の研究(124)古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(2)出土部材』、日本建築学会九州支部研究報告、第48号(計画系)、pp.777-780、2009年3月
- 9) オルケストラの背後にある建物は、通常スケエネと呼ばれ、列柱やニッチなどが配置された部分はスカエナエ・フロンスと呼ばれる。スカエナエ・フロンスは厳密には建物ファサードを指す。ここでは、舞台やスカエナエ・フロンスを構成する建物を総称して舞台建物と呼び、スカエナエ・フロンスの前にあるステージを舞台と呼ぶ。
- 10) M. Bieber: The History of the Greek and Roman Theater, Princetone, 1971; F. Sear: Roman Theatres, Oxford, 2006
- 11) E. Fiechter: Das Dionysos-Theater in Athen I. Die Ruine, Stuttgart, 1935; G. Caputo: Il Teatro di Sabratha e L'Architettura Teatrale Africana, Monografie di Archeologia Libica - IV, "L'Erma" di Bretschneider, Roma, 1959
- 12) Ginouves のギリシア・ローマ建築に関する事典によると、通常のイオニア式柱頭は Normal Ionic Capital、斜め45度に渦巻装飾が飛び出すイオニア式柱頭は Four Sided Ionic Capital と称される。R. Ginouves, Dictionnaire Methodique de L'Architecture Grecque et Romaine 2, Ecole Francaise D'Athens de Rome, 1992, p. 85, Pl. 44
- 13) ロータス・アカンサス式柱頭は、おそらくロータス式柱頭とコリント式柱頭を組み合わせたもので、アテネの風の塔のポーチや、アグリッパの音楽堂のポーチに使われている。J. Travlos: Bildlexikon zur Topographie des Antiken Athen, Tübingen, 1971, pl. 477. また、スカエナエ・フロンスに使われたかどうかは不明ながら、ディオニソス劇場の近くからも見つかっている。E. Fiechter, op.cit., Abb. 14. さらに、コリントやスバルタでも出土している。
- 14) 出土したアーキトレイブ・フリーズには、ファスキアの1段目と2段目の間に縄目文が、2段目と3段目の間に玉縁が、4段目に心臓装飾(heart-and-dart)が施されている。フリーズ部分には、バルメットとアカンサスの浮彫が交互にあり、最上部に卵臓装飾(egg-and-dart)とビードが施されている。
- 15) 2階建てのスカエナエ・フロンスでスカエナエ・フロンスのニッチ部分と列柱部分で柱の高さが違う例は、メリダ、イグウィウム、ドウツガなど

の劇場が挙げられる。F. Sear: op.cit., Fig. 20, 21, PLATE. 90

- 16) 2階建てのスカエナエ・フロンスをもつ劇場の1階と2階のポディウムの高さを以下に3例挙げる。メリダの劇場のスカエナエ・フロンスのポディウムの高さは、1階が2.49m、2階が1.38m(1階の55.42%)、カルタゴ・ノヴァの劇場のスカエナエ・フロンスのポディウムの高さは、1階が1.85m、2階が0.92m(1階の49.73%) イグウィウムの劇場のスカエナエ・フロンスのポディウムの高さは、1階が1.65m、2階が0.83m(1階の50.30%)である。F. Sear: op.cit., p. 35, TABLE 3.12.
- 17) スカエナエ・フロンスに3つのニッチが造られる場合、ニッチの中の柱は、列柱から独立している場合がある。最も顕著な例を挙げると、ボスラ、オランジュなどの劇場で、スカエナエ・フロンスの壁の前に立つ列柱部分は3階建てであるが、3つのニッチは2階建てとなっている。これは、ニッチのオーダーは列柱のオーダーから構造的に独立していることを示している。2階建てのスカエナエ・フロンスをもつ劇場の中で列柱部分とニッチの中の柱の高さが異なる例としては、メリダ、イグウィウム、ドウツガなどの劇場が挙げられる。メリダは、中央のニッチのみ高い柱を使用しているが、イグウィウム、ドウツガでは、3つのニッチすべてで列柱より高い柱を使用している。F. Sear: op.cit., Fig. 20, 21, PLATE. 67, 98, 99

#### 図版出典

- 写真1 メッセネ考古学協会撮影  
 写真2,3 伊藤重剛撮影  
 図1 メッセネ考古学協会作成  
 図2～12 著者作成

(2011年12月9日原稿受理、2012年4月27日採用決定)